

## 日本中世における『無門関』の受容

### —『無門関』の抄物の編纂と成立を中心に

李 華雨

『無門関』は、南宋後期を代表する宋朝禅者のひとりである臨済宗楊岐派の無門慧開(1183-1260年)が古則公案四十八則を拈提して頌と評唱を加えたものを、門人宗紹が編集した仏教書である。中国では早くに散佚し、朝鮮でも流行した形跡はない。しかし、日本では、入宋した無本覺心(1207-1298)が無門慧開に直接参じて帰国する際(1254年)に『無門関』を与えられたとされ、その後版を重ねて読み継がれた。

『無門関』は日本の禅宗界でとりわけ珍重されており、臨済宗のみならず、禅門各派に重用され、その注解書は刊写本あわせて60種近くに達する。室町時代の禅林では『無門関』がすでに広く読まれており、『無門関』に関する抄物なども作成されていた。柳田征司の調査により、『禅宗無門関抄』には、抄者を異にする26種類もの抄物が存し、写本は27本、版本は110本にのぼることが明らかになった。天英祥貞(-1511年)『無門関抄』や、伝雪庭春積抄『禅宗無門関抄』などが代表例として挙げられる。中世の漢詩文抄にもしばしば『無門関』が引用され、例えば室町時代中期の臨済宗僧万里集九(1428年-)の山谷抄『帳中香』などに見られる。

『無門関』の訳注や研究は数多くあるが、中世における『無門関抄』の編纂過程や流布、中世禅林における影響力に関する研究がいまだに不足している。先行研究の成果を踏まえながら、本論では、日本中世における『無門関抄』の版本をそれぞれ整理し、その成立と流布の系統を明らかにする。そして、その中で引用された書物に分析を加え、当時の禅僧たちの漢籍についての受容の様相を考察する。さらに、日本中世において、五山禅林の禅僧たちの『無門関』の読み方や理解、『無門関』の五山の漢詩文に与えた影響などといった、日本中世における中国伝来の禅籍の受容の実態の一端について、詳細に検討を試みる。

## 日本中世における『無門関』の受容 —『無門関』の抄物の編纂と成立を中心に

東京大学人文社会系研究科/日本学術振興会特別研究員 李 華雨

### はじめに

『無門関』は中国南宋後期を代表する禅者、臨済宗楊岐派の無門慧開が編集した公案集である。日本に伝来した後、禅林で重宝され、広く読まれている。当時、中国から輸入した典籍の増加に伴い、漢籍を勉強するブームは五山禅林で起こっていた。講義のノートを整理し、様々な抄物が作り出された。『無門関』に関する抄物の中で、現存する最初期のものが京都大学所蔵の谷村本『無門関抄』である。

先行研究では、『無門関』の訳注は数多くあり、『無門関』（平田高士著、東京：筑摩書房、1969.10）、『無門関』（西村恵信訳注、東京：岩波書店、1994.6）、『法眼録；無門関』（土屋太祐、柳幹康訳注、東京：大蔵出版、2019.3）などが挙げられ、主に『無門関』の訳注と思想内容に対する解釈である。しかし、『無門関』の抄物に関する研究が比較的少ない。近年、『無門関抄』の景印本が整理され、出版されつつ、『無門関抄』に対する基礎的な研究が行われている。その中で、『無門関抄』は主に日本中世の国語研究の資料として扱われている。例えば、金田弘は「天真自性派と『無門関抄』」（『洞門抄物と国語研究』、桜楓社、1976）では、戦国時代以降に書写された曹洞宗禅僧の『無門関抄』九種を対象とし、各抄の書誌を比較検討している。しかし、日本中世における『無門関抄』の編纂過程や流布、そして『無門関抄』系統におけるそれぞれの位置づけ、中世禅林における影響や受容の様相に関する研究がいまだに不足している。

本発表では、先行研究の成果を踏まえながら、日本中世における代表的な『無門関抄』、京都大学図書館谷村文庫所蔵の天英祥貞『無門関抄』（以下、谷村本）の編纂と成立の過程を明らかにする。そして、その中で引用された書物、特に漢籍に分析を加え、当時の禅僧たちの漢籍についての受容の様相を考察する。さらに、日本中世において、五山禅林の禅僧たちの『無門関』の読み方や理解、『無門関』が五山の漢詩文に与えた影響などといった、日本中世における中国伝来の禅籍の受容の実態の一端について、詳細に検討を試みる。

### 1 京都大学谷村文庫所蔵天英祥貞『無門関抄』の編纂と成立

無門慧開（1183-1260年）は中国、南宋末の僧である。諡は仏眼禅師で、『無門関』の編著で知られる。『無門関』は中国の宋元時代の目録にある著録が少なく、中国よりむしろ日本において多く流通している。日本への『無門関』の伝来に関しては、日本の留学僧であり、無門慧開の法嗣でもある心地覚心によって、日本にもたらされたと考えられる（清拙正澄が『無門関』を日本に将来したという一説もある）。『無門関』の版本についての研究は、平田高士が書いた『無門関』の解題などが挙げられる。現在日本に流布している『無門関』は、すべてその底本は応永本である（1）。応永年間の重刊後は、徳川時代に入って、何度も版を重ねている。

『無門関』は日本に伝来した後、禅林で広く流布し、読まれている。さらに、受容の重要

な一環として、『無門関』についての様々な抄物が作り出された。柳田征司の調査により、『禅宗無門関抄』には、抄者を異にする 26 種類もの抄物が存し、写本は 27 本、版本は 110 本にのぼることが明らかになった（2）。

本研究では天英祥貞（-1511 年）の『無門関抄』を取り上げる。その理由は、従来知られている『無門関』の抄物の多くは、江戸期に入ってから書の写本であり、特に提唱者が在世中に成立した抄物は非常に少ない。谷村本は永正四年（1507 年）の識語があり、これによれば、谷村本は提唱者が在世中の記録ということになり、また、現存する『無門関抄』として最古の文献となる。（尚、駒沢大学図書館忍滑谷文庫には書写年代不明の異本が存在する）谷村本の文献的価値は非常に大きいといえる。

先行研究では、龍谷孝道「中世曹洞宗と『無門関』：京都大学谷村文庫所蔵『無門関抄』を中心として」（印度学佛教学研究、65(2)、697-702、2017.03）が挙げられる（3）。龍谷孝道は京都大学谷村文庫所蔵『無門関抄』を紹介し、主に天英祥貞という禅僧個人の思想を検討し、谷村文庫所蔵『無門関抄』は、天真派における『無門関』参究の伝統を受け継ぎながら、太源派の語録抄が門派を超えていることを実証する価値を解明した。しかし、日本の禅宗史における位置づけを主に考察し、天英祥貞『無門関抄』の価値と『無門関抄』系統においての位置づけなどについての研究がまだ不足している。そして、谷村本『無門関抄』の日中文化交流史における意義がまだ解明できていない。

谷村本『無門関抄』では、まず大文字で『無門関』の正文を書き、返り点をつける。正文の下に小字双行の天英祥貞の注を付け加え、ほぼ毎句に注釈をつけている。そして、正文には傍注もあり、字音と意味など簡単な注釈をつける。例えば、序文の「慧開、紹定戊子夏」一句、傍注にはそれぞれ「無門」、「年号」、「ツチノエ」という注文を加えている。作者の名前、中国の年号とその発音にも注記を詳しく記載してある。中国の古典籍を理解するための基本的な概念や発音まで詳記する。そして赤色の評点や句読点もある。天英祥貞の提唱における注釈は、『無門関』各則の部分的なものではなく、ほぼ全文に対してなされている。ここでは、注釈の内容を主に三つの部分に分けて説明する。

1. 文字の意味
2. 禅宗の法系の提示
3. 禅理の撰述

## 2 京都大学谷村文庫所蔵『無門関抄』の中で引用された漢籍

谷村本『無門関抄』では、禅理の解釈が内容の多く占めるが、実際に、当時五山禅林で見られる様々な漢籍を利用し、それらの禅籍の内容を熟読した上で、よく理解して、自分なりの解釈を作り出している。本論では、まず谷村本『無門関抄』に出ている漢籍の引用をすべて整理した。整理の結果によると、天英祥貞は抄物の中で、13 種類の漢籍を直接引用することがある。

天英祥貞の『無門関抄』では、引用する際に、詳しい文章の内容を引用するのではなく、本文の関連度のもっとも高い文章の一句を引用し、書目の名前のみ引用する例も多い。例え

ば自序の注には、「傳燈一千七百則ノ公案」を提示し、詳しい文章を引用していない。そして、第二十四則「離卻語言」では、「圓覺經云、一切有為法、如夢幻……」とある。簡潔に出典の一句を記している。

禅籍以外、仏典の引用にも注目する。『法華經』、『金剛經』、『圓覺經』、『涅槃經』などの仏典の引用も見られている。その中では、『法華經』は、大乘仏教の代表的な經典であり、海外から渡来し、深く日本文化の中へ取り込まれていた。日本の室町時代ではすでに広く流布している。インドで撰述された經典であり、日本には漢訳された文献として招来されたものである。

禅籍や仏典の引用以外で、『剪灯新話』という小説集の引用も注目すべきである。

### 3 五山文学における『無門関』の受容

五山文学における漢籍の受容についての研究は近年注目を集めているが、主に唐宋詩集や儒典に集中している。五山文学における禅籍の受容に関する研究がまだ不足している。五山禅林では『無門関』が如何に読まれてきたのか、そして如何に理解されていたのか。本章では、五山文学における『無門関』の受容の実態を明らかにする。

本章は『五山文学全集』を取り上げ、五山僧たちの漢詩文の創作に見る『無門関』の影響を考察する。

作者	原文	『無門関』の出典
虎関師鍊『濟北集』 「佛論心論後序」	高祖云。 <u>佛語心爲宗。無門爲法門。</u>	「無門関自序」佛語心爲宗、無門爲法門。既是無門、且作麼生透。
龍泉令淬『松山集』 「栗窓」	透過金圈一關横、 <u>吞吐無門作麼生。</u>	「無門関自序」
中巖圓月『東海一漚集』 「贊無門佛眼肖像」	予昔看佛眼録。有 <u>狗子無佛性</u> 話頌之。但連寫二十箇無而已矣。	「第一則 趙州狗子」趙州和尚、因僧問、狗子還有佛性也無。州云、無。
明極楚俊『明極楚俊遺稿』 「跋虛菴頌什軸」	十方無壁落。四面亦無門。 <u>此菴作麼生入。</u>	「無門関自序」佛語心爲宗、無門爲法門。既是無門、且作麼生透。
景徐周麟『翰林葫蘆集』 「字說・書」	小補曰、于陣中、予晨夕參扣、柏樹子、麻三斤、 <u>乾屎橛、狗子話</u> 、知古德不謾人者。	「第一則 趙州狗子」
景徐周麟『翰林葫蘆集』 「祭春陽和尚文」	<u>春有花秋有月</u> 、南伏見東若王。	「第十九則 平常是道」頌曰、春春有百花秋有月、夏有涼風冬有雪。若無閑事挂心頭、便是人間好時節。

愚仲周及『卯餘集』	春有百花秋有月。趙州頂戴破草鞋。 救得南泉猫兒活。阿刺々々々々。 々。勉之。	「第十九則 平常是道」
此山妙在『若木集』 「丙子結夏秉拂石霜」	白日青天成寐語。	「第二十五則 三座說法」 頌曰、白日青天、夢中說夢。

表一：『五山文学全集』の中で『無門関』に関する記述（一部）（4）

表一から見ると、『五山文学全集』の中で『無門関』に関する記述は22箇所見られる。その中、虎関師錬、夢巖祖應、中巖圓月、景徐周麟、此山妙在、仲芳圓伊などの、鎌倉時代から室町時代の後期にかけて活躍した五山僧の13人がすべて『無門関』を閲読し、そして彼の思想を自分の作品に取り込んでいた。ここでは、主に2つの例を挙げて、『無門関』の受容について考察を行う。

#### おわりに

本発表では、日本中世における『無門関』の受容に着目し、16世紀前半に作り出された谷村本『無門関抄』を中心に検討した。さらに、五山禅林における『無門関』の受容、特に五山漢詩文に与えた影響を考察した。

講学の産物として膨大な数の漢籍の注釈書（抄物）が生み出された。『無門関』の抄物の場合、天英祥貞の『無門関抄』が無門関抄の中で重要な地位を持っていると考えられる。谷村本『無門関抄』が現存する無門関抄で最初に成立し、頻繁に引用され、江戸時代まで伝えられ、日本において『無門関』を解説するために極めて重要な注釈書であると考えてもよい。日本における『無門関』の受容史の研究において極めて重要な資料である。『無門関』は日本に将来した後、禅僧たちの愛読書にもなる。当時の五山僧の詩文ではしばしば見られる。今後、江戸時代に成立した数多くの『無門関抄』の様相が研究されることを期待している。

#### 注

- (1) 平田高士著、無門関、東京：筑摩書房、1969.10。金子白夢著、無門関の新研究、大阪：青年通信社、1943.12
- (2) 柳田征司「抄物目録稿(原典漢籍集類の部)」『訓点語と訓点資料』第113期、2004年、3-82頁。
- (3) 龍谷孝道「中世曹洞宗と『無門関』：京都大学谷村文庫所蔵『無門関抄』を中心として」(印度学佛教学研究、65(2)、697-702、2017.03)
- (4) 本稿は『五山文学全集』（上村観光編、詩文部：第1輯-第4輯、裳華房、1905年）と『五山文学新集』（玉村竹二編、第1巻-別巻2、東京大學出版會、1967年3月-1981年2月）を利用する。